



391 講談社現代新書

日本の古典①

神々と人間

埴輪はにわのあのうつろな眼は、現代のわれわれに

なにをうったえるだろうか。素朴なその表現の根底に、

やがて葉をひろげる文学の萌芽を感じとることは

できないだろうか。本書は、古代の人々の美と真の発現から

文学の誕生を探究し、『古事記』『日本書紀』など「語り」の文学の流れに、

かれらの祈りと憧憬、そして歴史への意識をさぐり、

大いなる抒情の源流をなす『万葉集』に、よろこび、かなしみ、

なげき、うたう群像を見る。民族のこころの系譜をあとづける

中西進

日本の古典シリーズ全5巻編成の第1巻



神々と人間日本の古典①

昭和五〇年四月二四日第一刷発行 昭和五七年二月二〇日第三刷発行

定価——四二〇円

著者——中西進

©Susumu Nakanishi 1975 Printed in Japan

発行者——加藤勝久 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―三 郵便番号二二 電話〇三―九四五―二二 振替東京八―五三〇

装幀者——杉浦康平＋海保透

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

ISBN 4-06-115791-4

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。(学1)

中西進



神々と人間

日本の古典①

講談社現代新書

目次

序説 — 5

第1章 — 文学の誕生 — 11

1 — 律動 12

2 — 力 25

3 — ことば 36

第2章 — 語りの文学 — 47

1 — 語りの発生 48

2 — 人間への目 58

3 — 歴史の意識 69

第3章 — 抒情の成立 — 81

1 — 歌謡と和歌 82

2 — 和歌の古代性 94

3 — 変貌 105

第4章 — 新しい皮袋 119

1 — 漢文という形式 120

2 — 漢詩の受容 130

3 — 心と詞 142

第5章 — 人間の文学 155

1 — 人間の原点 156

2 — 願望と絶望 167

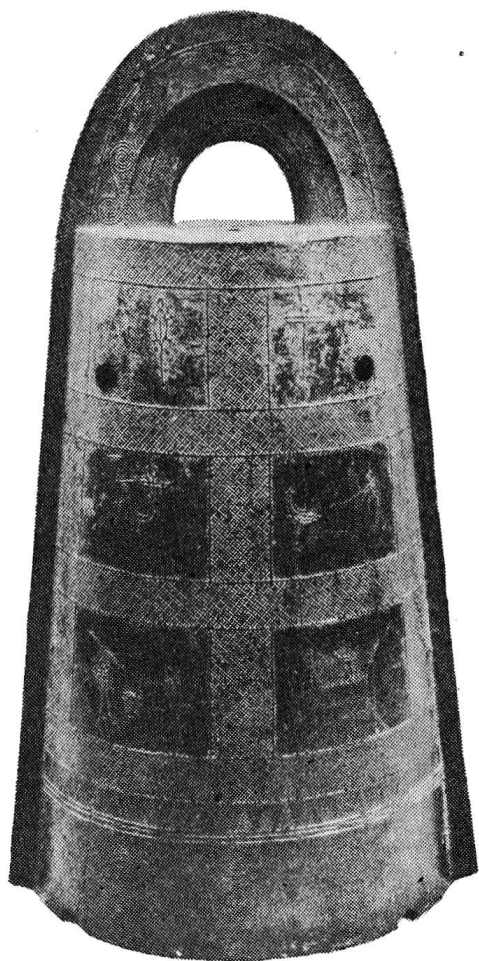
3 — もう一つの散文 178

あとがき 189

年表 192

索引 198

銅鐸の絵画は何を語るか（香川県出土）



序説

これから述べていこうとする古代の文学は、ほぼ九世紀以前の文学である。今から考えると千年以上昔のことになる。しかもこの上限は、いつとは測りきれない太古のことである。この国土に人間が住みつき、生活を営んだ時期は何万年か以前のことであろうが、おそらく、ごく素朴な文学は、ほとんど人間の生活と同時に始まるであろう。それは氣も遠くなるように遙かな昔日のことである。

古代の文学とは、そうした遙かな昔のことに属する。だからそれは今日から見れば、よほど違ったものだった面が、当然考えられる。たとえば、「海さか」ということばがある。「さか」とは境界であり、坂であり、例の浦島の子が「海さかを越えて榜ぎゆくに」といった時には、この海の果ての境界をなす坂を越えて、舟をこいでいったということになる。

われわれはすでに、地球はまるい天体の一つであって、大海を航行しつづければまたもとの地にもどってくるということを知っている。だから海の境界などはないし、ましてやそれが傾斜をなしているなどということは考えない。この古代人の表現は、おかしいということになる。

しかし彼らはそれを信じていた。むしろそれがわれわれにおける「地球はまるい」に相当するものであった。古代の文学を考える時にまず必要なことは、このような彼らにとっての眞実

である。「海さか」といったことは、ひょっとすると無知だったのだといわれるかもしれない。しかし人間の精神の働き、靈魂の存在だとか神への志向だとかといったものを深く考えてみると、はたして彼らの思考を無知のゆえだと決めつけられるだろうか。

古代人によれば、天も海も同一のものであった。これをともに「あま」とよぶ。こうしたことは、事実としての存在や現象が同じものだということではむろんない。そのあり方が天も海もひとしいというのである。とすると彼らには、物質的な事実など、どうでもよかったとさえいえるだろう。心に直覺されるものによって物体をみとめた、ということである。眞実は、事実よりはるかに事実だったのである。

自然科学的思考の方法は、事実に絶対の価値をおくといつてよいだろうか。しからば古代は、眞実が絶対の価値をもっていたといえる。そうした、いわゆる合理以前の価値体系によって組み立てられているのが古代人の思考である。これを基底として古代の文学は成立する。

また、このように今日と古代とを比べずとも、すぐ後に続く平安時代と比較してみても、九世紀以前の文学は、かなり異質な趣をもっている。いわゆる日本の美意識を決定したものは平安朝の文物である。平安朝の文学作品にみられるような湿潤な情趣は、日本的なものとして、われわれの感性や志向の特性のごとくいわれる。これは確かに正しいことのように思われ、多

湿な氣候風土の中にあれば当然とも考えられる。

しかし、古代の文学は妙に乾燥している。居住する風土は変わらないのに、ふしぎに陰湿な暗さがない。これは、風土なるものが文学を決定するうえに大きな力をもつものであることは否定できぬとして、ただそれだけが文学の条件になるのではないことを物語っている。古代人は、王朝以後の人々が住んだのとは別の社会に住んでいたように思う。別の社会とは、一つには海外に向かって開かれていた社会であり、「国家」といった概念も、それ以後のものに比べると、よほど自由な流動性をもつものであった。また、当時の社会は階層的・地域的に峻別されて、身動きできなくなってしまう後の時代と違って、きわめて大らかな流通性をもっていた。よく『万葉集』について、天皇から乞食者ほがいびとにいたる広い階層の、しかも広範な地域にわたる歌の集だという発言があるが、事の次第が実は右のごときであったことに、それは起因している。

こうした社会に産み出された古代の文学が、「あはれ」の抒情といったものに代表されるような文学になるはずはない。ここにも一つ、古代文学の特質が考えられるのである。

もとより、古代は歴史の起点に立っている。これを源流として以後の文学が発生してくるのだから、それらの原型を内包していることはいうまでもない。律文においては短歌形式が以後

の主流を占め、散文にあっても歌から物語が自立し完成へと向かっていく。しかし、原型というものが、より多く形の問題であるのに対して、古代の文学を特徴づけるものは、より多く内容に存するようである。以下の記述にも、この形と内容（心）を問題としていくが、両者には源流としての類似と、後の時代の文学性を拒否する独自性が、微妙にからみ合っている。その様相を過不足なく把握するところに、古代の文学の魅力もまた存在するように思われる。

土偶(岩手県軽米町出土)



第1章—文学の誕生

1 — 律動

踊る土像

比較的よく知られたものだから、見たことのある人も多いだろうが、舞い踊る群像をもつ須恵器^{すえき}が出土している。いま京都大学に所蔵されているもので、茨木市の南塚古墳から現われたものである。

この群像のある者は、高々と手をあげている。歓喜するもののごとくである。またある者は右手をかざし左手を腰にあてて、思いなしか腰をひねっているようにも見える。裾のひろがり裳^もをつけた女性を意味するか。彼女は明らかに踊っている。そしてまた他のある者は、まっすぐに伸ばした両手をもって、何物かをささげている。ひざまずいた姿である。頭上の大きな髪型は、いわゆるつぶし島田で、他の埴輪では巫女^{みこ}に見られるものだ。彼女は神に祈りをささげる者のようである。

彼らは神を前に音楽を奏し舞踊を演じて神をなごめ、またそうすることによって自らも喜悅の中にある。須恵器は時代の新しいものだが、古く、そうした姿で神を祭ったことをみとめて

●踊る土像 へ上―南塚古墳出土・下―岡山県鹿忍出土



よいであろう。『日本書紀』神代の一書によると、火の神を生んでみまかったイザナミの神は、熊野の有馬村に葬られたという。そして書紀は、

土俗、この神の魂を祭るには、花の時にはまた花をもちて祭る。また、鼓、吹、幡旗をもちて、歌ひ舞ひて祭る。

と伝える。この「歌ひ舞ひて」という記述は、まさに右の群像の姿を想像させるものである。

踊る土像は、まだほかにもある。同じく埴の肩につけられたもので、岡山県牛窓町鹿忍に出土したものは、一人の人物が左手をあげ、右手を体につけている。やや顔を左上にあげて右肩をおとしている恰好は、上下した両手につれた動きを示し、稚拙けれども象徴的に体のリズムを表現していて、これも踊る姿をかたどったものと思われる。同じ土器の別の肩には、四足の獣と思われるものを従えた男性や、馬にまたがった人物、相撲をとる人々がつけられているが、これらが彼らの生活の一コマであることはいうまでもない。それらの一つとしての舞踊像は、喜び舞う悦楽の日の一景として造型されたものであろう。

この踊る姿を、もっと如実に示してくれるのが、埼玉県大里郡江南村から得られた埴輪であることは、いうまでもない。この大小それぞれに五十センチをこえる埴輪は、ともに左手をあげ右手を腰や胸にあてて、先にあげた岡山県出土の埴の像を、より明瞭により精巧に表現して

●踊る埴輪（埼玉県大里郡江南村出土）

